

擦文文化の雑穀農耕

山 田 悟 郎

「北海道考古学」第36輯 別刷 2000年3月

【論 文】

擦文文化の雑穀農耕

山 田 悟 郎*

キーワード：擦文文化 作物種子 アワ キビ オオムギ

1. はじめに

擦文文化における農耕の役割が論議され始めたのは、豊富町豊里遺跡からソバ、アワ（河野 1959）、根室市西月ヶ岡遺跡からキビもしくはモロコシ（八幡編 1966）、浦幌町十勝太若月遺跡からオオムギ、シソ、アワ（後藤 1974）の報告がなされてからで、桜井（1967）は弥生文化、古墳文化の農業技術との関連で擦文文化の農耕を肯定的に考え、石附（1974）は「本州文化の強力な文化的影響の下に成立した擦文式文化の当時においては、近世以降のアイヌ民族の状況から考える以上に農耕の比率の高かった可能性も決して捨てきれないことは確かであろう。」と、擦文文化の畑作農耕の役割を高く評価しようとした。しかし、1970年代に農耕の存在を示す作物種子が発見されたのは上記の3遺跡のみで、擦文文化の生業の中心は河川でのサケ・マス漁であったとする考え方が支配的であった。

擦文文化の農耕に関する資料が増加するのは1980年代になってからである。そのきっかけが土壌のフローテーション作業（浮遊選別）を取り入れた、北海道大学構内サクシュコトニ川遺跡の発掘調査で、以後、作物種子の出土例が急激に増加した。以下では、擦文文化の遺跡から出土した作物種子をととして、擦文文化の時代に北海道で行われた雑穀農耕について探っていきたい。

2. 北海道の遺跡から出土した作物種子

擦文文化は北海道最後の土器文化で、その開始年代は7世紀後半で（横山 1990）、その終末について大方の認めるところは12世紀末から13世紀である。ここでは、7世紀後葉～9世紀前葉までを前期、9世紀中葉～10世紀を中期、11～13世紀を後期として3期に区分し、雑穀農耕が道内各地に拡散していった様子をみていくこととする。

擦文文化の38遺跡からは、遺跡によって出土量は異なるが表1に示したように、コメ、オオムギ、コムギ、アワ、キビ、ヒエ、ヒエ属、モロコシ、ソバ、小豆、緑豆？、シソ属、アサ、ベニバナ、アブラナ科、ウリ科、ヒョウタンなど17種類の作物種子が出土している（山田 1998）。

前期：蘭島D遺跡の7世紀末の土壌から出土した、7粒の炭化したコメが今のところ最も古い（吉崎 1991）、作物種子の出土例が増加するのは8世紀に入ってからである。8～9世紀前葉の恵庭市柏木川11遺跡（吉崎 1990a）など、石狩低地帯周辺の13遺跡から作物種子出土の報告がある。主となるのはアワとキビで、遺跡によって組み合わせが異なるがヒエ、オオムギ、

* 北海道開拓記念館

第1表 擦文文化の遺跡から出土した栽培種子一覧

遺 跡 名	時 期	アワ	キビ	ヒエ	ヒエ属	ムギ?	オオムギ	コムギ	コメ	ソバ	モロコシ	アズキ	緑豆?	シソ属	アサ	ベニバナ	アブラナ科	ウリ科	ヒョウタン
1. 小樽市磯島D地点	前期 7世紀末																		
2. 小樽市磯島C地点	前期 8世紀前半																		
3. 恵庭市中島松5遺跡B地点	前期 8世紀後半	◎	◎																
4. 恵庭市北木川11遺跡	前期 8世紀末～9世紀前半	◎	◎																
5. 沼村ヘロカルウス遺跡	前期 8世紀	◎	◎																
6. 千歳市丸山遺跡	前期 8世紀	◎	◎																
7. 札幌市N426遺跡	前期 8世紀?	◎	◎																
8. 札幌市K435遺跡	前期～後期 8世紀前半～12世紀	◎	◎																
9. 千歳市米田遺跡	前期～後期 8世紀～12世紀	◎	◎																
10. 千歳市オサツ(2)遺跡	前期～中期 8世紀～9世紀	◎	◎																
11. 千歳市ウツクマイN遺跡	前期～中期 7世紀～10世紀	◎	◎																
12. 札幌市K113遺跡北34条地点	前期後半 9世紀前半	◎	◎																
13. 札幌市K113遺跡北35条地点	前期～中期 9世紀前半～10世紀中葉	◎	◎																
14. 札幌市H317遺跡	中期 9世紀末～10世紀前半	◎	◎	◎															
15. 札幌市サクシュコトニ川遺跡	中期 9世紀中葉～10世紀	◎	◎	◎															
16. 札幌市K39遺跡長谷工地点	中期 9世紀～10世紀前半	◎	◎	◎															
17. 千歳市ユカンボシC2遺跡	中期 ?	◎	◎	◎															
18. 深川市東広里遺跡	中期～後期 10世紀～11世紀																		○
19. 小平町高砂遺跡	中期～後期 9世紀後半～12世紀																		
20. 札幌市K441遺跡北33条地点	中期～後期 9世紀後半～12世紀	◎	◎	◎															
21. 札幌市K39遺跡大木地点	中期～後期 10世紀後半～11世紀前半	◎	◎	◎															
22. 苫前町香川三線遺跡	中期後半～後期 10世紀後半～12世紀	◎	◎	◎															
23. 苫前町香川6遺跡	中期後半～後期 10世紀後半～12世紀	◎	◎	◎															
24. 札幌市K39遺跡北11条地点	中期～後期 10世紀後半から11世紀前半	◎	◎	◎															
25. 札幌市K441遺跡北34条地点	後期 11世紀中葉～12世紀	◎	◎	◎															
26. 札幌市K39遺跡緑化地点	後期 11世紀以降	◎	◎	◎															
27. 札幌市K39遺跡タカノ地点	後期 11世紀～13世紀	◎	◎	◎															
28. 余市町大川遺跡	後期 11世紀～	◎	◎	◎															
29. 佐呂間町浜佐呂間遺跡	後期 11世紀後半～12世紀	◎	◎	◎															
30. 浦幌町十勝太若月遺跡	後期 11世紀後半～12世紀	◎	◎	◎															
31. 松前町札前遺跡	後期 11世紀後半～12世紀	◎	◎	◎															
32. 神恵内町観音洞窟	後期 11世紀中葉～12世紀	◎	◎	◎															
33. 豊富町豊里遺跡	後期 12世紀	◎	◎	◎															
34. 遠軽町美河江遺跡	後期 12世紀	◎	◎	◎															
35. 枝幸町格切川左岸遺跡	後期 12世紀?	◎	◎	◎															
36. 雄武町雄武穴群遺跡	後期 12世紀	◎	◎	◎															
37. 釧路市北斗遺跡	後期 12世紀後半～13世紀	◎	◎	◎															
38. 根室市西ヶ丘遺跡	後期 12世紀後半～13世紀	◎	◎	◎															

◎100粒～1000粒出土 □ 擦文オオムギ 1粒～100粒出土 ■ 擦文オオムギ 100粒以上出土 (山田 1998) に一部追加

コムギ、ソバ、アズキ、シソ属、アサとコメの幾つかを伴う。

柏木川11遺跡では、8世紀代の1号住居床面のほぼ全面から脱穀したキビとアワが合計で10,017粒検出され、住居の北東部分で多量に検出されたことから、容器に収納されたものが火事によって散乱したと考えられている(吉崎 1990a)。また、札幌市K435遺跡では8世紀前葉から後葉の遺物包含層と住居跡、焼土などからアワ3,106粒、キビ388粒のほか、ヒエ属、コメ、ムギ、シソ属、アサが出土した。ムギと分類されたもの37粒中でオオムギは1粒だけで、他は後述する札幌市サクシュコトニ川遺跡から出土したオオムギとコムギのちょうど中間に当たる計測値を示すもので、コムギの可能性のあるものの断定はできないとされている(吉崎 1993)。このように前期ではオオムギもしくはコムギが共伴するが、出土量は少ない。

中期：石狩低地帯周囲に遺跡が集中するが、石狩平野内陸の深川市や旭川市、日本海岸に沿って幾分北上した留萌市や苫前町周辺まで遺跡の分布域が拡大した時期である。札幌市サクシュコトニ川遺跡(G.Crawford 1987、吉崎・椿坂 1990)、同市H317遺跡(吉崎・椿坂 1995)、苫前町香川三線遺跡(吉崎 1986)など11遺跡からアワ、キビ、ヒエ、ヒエ属、オオムギ、コムギ、ソバ、小豆、シソ属、アサ、ベニバナ、アブラナ科、ウリ科、ヒョウタンなど14種類の作物種子が出土しているが、主となるのはアワ、キビ、オオムギ、コムギである。

この時期を代表するのが9世紀中葉から10世紀のサクシュコトニ川遺跡で、9世紀後半の第2文化層からは5軒の住居跡と土壌、炭化物が集積した廃棄スポットや各種遺物が発掘され、キビが5万粒以上、アワが8万粒以上、長粒タイプのオオムギが2万以上、コムギが6千粒以上出土したほかコメ、アサ、シソ属、ウリ科、アブラナ科が出土している。炭化物が集積した廃棄物スポットからオオムギとコムギの穂軸も出土し、屋外で脱穀作業が行われていたと考えられている(椿坂 1989)。ほかにサケ類を捕獲した「ヤナ状の遺構」が検出され、サケ科の遊離歯や椎骨も多量に出土。

H317遺跡でも9世紀末から10世紀前半の住居跡や屋外炉から長粒タイプのオオムギ、コムギ、アワ、キビ、ヒエのほか、アサ、シソ属、アブラナ科、小豆と、コムギの穂軸、稈が出土。また、石狩平野の東端にあたる10世紀から11世紀頃の東広里遺跡では、コメ10粒が出土(矢野 1989)。

後期：中期後葉から後期にかけて、遺跡の分布は道北、道東にも拡大する。遺跡の分布域拡大に伴って、作物種子も北は日本海側の豊富町やオホーツク海沿岸の枝幸町、東は根室市や釧路市、南は松前町など道内各地の14遺跡から出土の報告がされている。余市町大川遺跡(吉崎 1990b、1996)や札幌市K441遺跡北34条地点(吉崎 1989b)を除けば、いずれの遺跡とも出土した作物種子の種類・数は少ない。やはりアワ・キビが主で、遺跡によってオオムギ、ヒエ、ソバ、モロコシ、小豆、シソ属、アサ、ベニバナなどの幾つかが共伴する。また、道央、道南の遺跡ではコムギとコメ、ヒエが共伴する。

注目されるのが浦幌町十勝太若月遺跡と(後藤 1974)、釧路市北斗遺跡(山田 1995a)である。若月遺跡では11世紀後半から12世紀と推定される焼失した住居跡から、カマド前の甕形土器に脱穀された短粒タイプのオオムギがびっしりと詰まった状態で発見され、住居中央の炭

化材上からはシソ属とキビが、北西隅からはキビが出土した。また、12世紀後葉から13世紀と推定されている釧路市北斗遺跡でも、6軒の住居から多量のアサとキビ、短粒タイプのオオムギ、小豆が出土し、豊里遺跡ではキビ、緑豆と多量のペニバナが出土（松谷 1986、Matsutani 1988、山田・椿坂 1991）。

大川遺跡では11世紀から12世紀と推定される遺構から、多量のコメと長粒タイプのオオムギ、ヒエ、コムギ、キビ、アワなどの出土が報じられている。しかし、正式な報告書が刊行されておらず詳細は不明。津軽海峡に面した松前町札前遺跡では鍛冶遺構が確認され、住居内からコメ、長粒タイプのオオムギ、コムギ、アワ、キビ、モロコシの種子やネギ属の鱗茎が出土（山田・椿坂 1989、1991）。オオムギ、コムギが主であるがコメも出土しており、対岸の津軽半島との交流が推定される。

道央部で擦文文化が開始された7世紀～8世紀頃、オホーツク海沿岸のオホーツク文化期の住居跡から短粒タイプのオオムギ、アワ、キビが出土する。雄武町雄武堅穴群遺跡では沈線文系土器が出土した1号住居床面からオオムギとキビが出土し、オオムギの暦年代はAD590年（AD535～AD635年：GEO-1406）である（山田 1995b、1996）。また、オオムギ、アワ、キビが8～9世紀初頭の枝幸町目梨泊遺跡4号住居跡床面（吉崎 1994）、9世紀頃とされる網走市二ツ岩遺跡2号住居跡（山田ほか 1991）と湧別町川西遺跡から出土（吉崎 1995）。オオムギの年代は、二ツ岩遺跡からものが暦年代でAD780年（AD690～875年：GEO-1404）、川西遺跡のものが暦年代でAD720、735、760年（AD675～800年：GEO-1405）である（山田 1996）。

3. 雑穀農耕の背景

本州東北部の農耕文化の影響を強く受けて成立した擦文文化であっても、気候条件、農具などの条件が満たされねば農耕を行うことが困難である。ここでは、気候環境、遺跡の立地、鉄製農具の存在といった点から、農耕の可能性について考えてみたい。

気候環境：阪口（1984）は、途中に小寒冷期を挟むものの、8世紀から13世紀は現在よりも温暖、吉野（1982）も紀元800～1200年を気候小最良期とし、縄文時代の温暖期ほどではないが温暖でその極が9～10世紀頃にあったとしたほか、鈴木（1990）でも7、8世紀頃から11世紀頃までを中世初期の暖期「リトルオプチマム期」とし、北川（1995）は7世紀から8世紀に顕著な寒冷期が認められるものの、8世紀から12世紀にかけては平均1～2℃温暖であったとし、擦文文化に該当する8世紀から12、13世紀は温暖期であったとする指摘が多い。赤松・右代（1992）も、北海道およびサハリンのオホーツク文化期の貝塚中から、ウネナシトマヤガイなどの温暖水系種の出土を指摘し、7～10世紀初め頃は現在よりも温暖であったと報告している。8世紀から12、13世紀の間には一時的な冷涼期を挟むものの、現気候下では畑作による生産力が低い道東・道北も、畑作農耕が可能な気候条件となっていた。

遺跡の立地：石狩低地帯周辺や日本海沿岸では、それまであまり集落が形成されることがなかった沖積扇状地、沖積低地の微高地や海岸砂丘上に集落が形成される。擦文文化の遺跡が河川に近い低地に立地したことについて、集落の立地・分布と河川との関係を分析した藤本（1982）

は、擦文文化の主たる生業をサケ・マス漁などの河川漁労であるとし、擦文文化中期以降には河川流域を単位とした地域集団の成立を仮定し、河口付近にみられる大集落はこれらの集団の季節的なサケ漁の基地であるとした。しかし、この見解に対して吉崎（1984）によった、「サケは、産卵床の近くで捕獲するのが最も効率的簡単である。」との指摘があり、河口付近の大集落跡を河川漁業の基地とするには異論がだされていた。日本海沿岸の主要河川河口部に分布した集落の役割について瀬川（1997）は、交易の窓口である河口港の集落であったとしている。

サクシュコトニ川遺跡や旭川市錦町5遺跡（旭川市教育委員会、1984）では「ヤナ状の遺構」が発見され、サケ漁が行われていたことが知られ、今回報告した作物種子が発見された38遺跡のうち19遺跡からサケ科やコイ科、ニシン科の歯や骨が抽出され（山田、1998）、擦文文化の遺跡が立地した河川沿いや海域で漁業が行われていたのは確かである。しかし、畑跡はまだ確認されていないが、集落の前面や背後に広がった沖積地や砂丘上、台地上の平坦地は畑作に適した条件を満たしており、河川沿いの沖積地に遺跡の多くが立地したのは、漁業資源確保と農耕活動の場を求めた結果と考えられる。

鉄製農具：24遺跡から鋏先10点、鎌22点、斧20点など鉄製農具が出土している（山田、1995b）。遺跡数に比較するとその数はまだ少ないが、沖積低地に遺跡が立地する道央、道北の日本海沿岸に面した河川沿い低地、石狩川中流域の深川市から旭川市にかけた沖積低地上の遺跡での出土例が多く、鉄製農具が出土した大半の遺跡で作物種子の出土も確認されている。

宇田川（1976）によった、鉄製品の保有は独占所有ではなく「セトルメント・ユニット」間の共有財産であったとする指摘、天野（1983）によった、金属器の役割は道具を作るための道具にとどまったものであり、金属器普及量の小さいもしくはゼロの集団でも、集団による共同所有・利用、もしくは集団間の共同利用の形で金属器を使用することができ、これによって、必要な生産用具は確保できたとする指摘がある。ただ、中期から後期にかけてフィゴ羽口の出土例が増加し、この頃から鉄製品のリサイクルが本格的に始まったことを考えると、鉄製品出土例の少なさは一概に鉄製品流通が少なかったこと、その所有数の少なさを物語るものとは言いきれない。

4. 日本列島北端で展開された雑穀農耕

作物：7世紀後半から12、13世紀にかけて日本列島北端の北海道で展開された擦文文化の遺跡は、農耕に適した河川沿いの微高地や沖積扇状地に立地することが多く、畑跡の存在は確認されていないものの、17種類の作物種子が出土し、鋏先、鎌、鉄斧といった農具も出土するなど、畑作が行われていたことを示す資料が増加している。札幌市K39遺跡北18条地点からは縦杵も出土し（藤井・秋山 1999）、畑作農耕による生産が期待されていたものとなっていて、佐々木（1988）によって提示されているナラ林文化における農耕段階（ナラ林型雑穀畑作文化）の段階に達していたと考えられる。

前期にはアワ、キビが主で、遺跡によってヒエ、オオムギ、コムギ、ソバ、アズキ、シソ属、アサの幾つかがセットとなった栽培が行われたが、農耕が行われたのは集落跡が確認されてい

る道央以南に限られる。作物種子が出土した遺跡の多くは8世紀に入ってからのもので、奈良末から平安時代にかけての気候の温暖化も農耕定着に寄与したと考えられる。

三浦(1991、1992)は、7世紀から8世紀は東北北部から北海道一円で、ほぼ同一な技法で製作された土器を使用した時期で、その頃の東北北部の生業は農耕で、地域によって異なるが稲作が主となって畑作を伴ったものや、畑作を主とした形態がみられるとした。作物の組み合わせをみると、青森県内の奈良から平安期の農耕社会における作物は表2のようにコメ、オオムギ、コムギ、アワ、キビ、ヒエ、シソ属、アブラナ、アサ、小豆、大豆で(山田 1998)、ここからコメと大豆が抜けたのが北海道の作物構成である。

中期前葉や中葉の集落跡は前の時期とほぼ同じ地域に限られるが、中期後葉には道央から河川沿いに内陸に入り込んだ深川市や旭川市、日本海沿いに北上した留萌市や小平町、苫前町などにも集落が進出する。作物種子が出土した遺跡の多くが道央に集中するが、擦文文化の拡散にともない香川三線遺跡や香川6遺跡でもアワ、キビ、短粒タイプのオオムギ、シソ属とソバの栽培した農耕が始まり、東広里遺跡では東北地方からの移入と考えられるコメが利用されていた。この時期には、前の時期の作物にヒエ属、ベニバナ、アブラナ科、ウリ科、ヒョウタンの5種類が加わり、作物構成は14種となるが、主として栽培されたのはアワ、キビ、オオムギ、コムギである。

道央のサクシュコトニ川遺跡では、アワ、キビ、オオムギ、コムギ、ヒエ属など10種の作物が、H317遺跡でもアワ、キビ、ヒエ、オオムギ、コムギなど7種類の作物が栽培されていたが、道央以北では2～5種類が確認されただけで、この違いが生業形態の中での農耕生産物が担った比重の差を示すものかもしれない。道央では東北北部と同様な長粒オオムギと、サクシュコトニ川遺跡やH317遺跡で確認された小型のコムギがセットとなって出土する。中期後半になって道北でもオオムギが出土し始めるが、道央でみられた長粒タイプのオオムギとは形態が異なった短粒タイプのもので、コムギは共伴しない。また、道央に限ってこの時期になるとヒエ・ヒエ属が5遺跡から検出され、この頃になってヒエ栽培も定着した様子を見せる。

擦文文化の集落が全道一円に分布した後期になると、オホーツク海沿岸、十勝平野や釧路湿原、根室半島の遺跡からも作物種子が出土し、畑作農耕が全道各地で行われていた状況を示す。しかし、道央の余市町大川遺跡で12種類、K441遺跡北34条地点で6種類、札前遺跡で6種類の作物がみられるが、浜佐呂間遺跡や北斗遺跡で4種類、十勝太若月遺跡、豊里遺跡で3種類と作物の数は少ない。そこでみられるのはキビ、アワ、オオムギ、ヒエ属、アズキ、シソ属、アサなどであるが、その中心となるのがアワ、キビ、オオムギである。

大川遺跡や札前遺跡からはコメが出土し、特に大川遺跡のコメは炭化米としては異常なkg単位で出土している。三浦(1991)によった、本州北部地域はそこで生産された須恵器、鉄、塩、コメを北海道の擦文文化圏への供給を主目的にしていた、いわば「擦文文化圏の拠点地域」であったとした指摘がある。東北北部の五所川原系の須恵器、岩木山山麓を中心とした製鉄炉で生産された鉄、陸奥湾岸で生産された塩、そして陸奥湾岸と津軽平野の沖積地で生産されたコメが北海道との交易品とされていたことを考えれば、日本海ルートでの海運基地と推定されて

第2表 東北北部の奈良・平安時代の遺跡から出土した栽培種子

遺跡名	時代	コメ	オオムギ	コムギ	アワ	キビ	ヒエ	ソバ	シソ属	アブラナ	アサ	小豆	大豆	ノロ	ヒョウタン	ゴマ	ナス	穀類	豆類
青森県 1.八戸市田面平遺跡①	奈良 7世紀～8世紀	○			○					○									
2.下田町向山(4)遺跡	奈良 8世紀	○			○														
3.六戸町堀切沢(3)遺跡	奈良 8世紀後葉				○														
4.下田町中野平遺跡	奈良～平安 8世紀後葉～10世紀前葉	○			○														
5.尾上町李平下安原遺跡	平安 8～9世紀	○	○																
6.八戸市能野堂遺跡	平安 8世紀後葉～11世紀		○																
7.八戸市風張(1)遺跡	平安 8世紀中葉～11世紀?		○																
8.青森市近野遺跡	平安 9世紀			○	○														
9.浪岡町山元(2)遺跡	平安 9世紀～10世紀前葉	○			○														
10.青森市欲沢遺跡	平安 9世紀～10世紀	○			○														
11.東北町往来ノ上(1)遺跡	平安 10世紀前葉	○			○														
12.浪岡町野尻(4)遺跡	平安 9世紀前葉～10世紀後葉	○		○	○														
13.青森市三内遺跡	平安 10世紀前葉	○			○														
14.六ヶ所村荒沢(1)遺跡	平安 10世紀後葉	○			○														
15.東北町内能沢沢遺跡	平安 10世紀～11世紀	○			○														
16.木造町石上神社遺跡	平安 10世紀	○																	
17.浪岡町杉ノ沢遺跡	平安 10世紀	○																	
18.鈴ヶ沢町至沢遺跡	平安 10世紀～11世紀前葉	○																	
19.弘前市茶屋敷遺跡	平安 11世紀	○																	
20.碓ヶ沢町古館遺跡	平安 11世紀後葉	○																	
21.黒石市高館遺跡	平安 11世紀後葉	○																	
22.弘前市中崎館遺跡	平安 12世紀	○			○														
岩手県 23.浄法寺町五虎1遺跡	平安 10世紀中葉以前	○			○														
24.軽米町色子久保W遺跡	平安 10世紀中葉以前	○			○														
25.花巻市丁目遺跡	平安	○			○														
26.砂法寺町沼久保遺跡	平安	○			○														
27.二戸市駒込遺跡	平安	○			○														
28.江刺市落合1遺跡	平安	○			○														
29.津南町江刺家遺跡	平安	○			○														
30.宮古市細越遺跡	平安	○			○														
31.北上市上免野W遺跡	平安	○			○														
32.久慈市泉原遺跡	平安	○			○														
33.二戸市馬場遺跡	奈良・平安・中世	○			○														
34.平泉町柳之御所	平安末期	○			○														

(山田 1998)より

いる大川遺跡から大量のコメが出土し、津軽海峡を挟んで青森県と対峙した台地上に立地した札前遺跡からコメが出土したとしても不思議ではない。畑作での収穫物だけではなく、本州で生産され移入されたコメも食糧資源の一つとして期待されていた状況にあったことを示す。

2系統のオオムギ：擦文文化の遺跡から数多くの作物種子が出土しているが、特徴的な出土状況を示すのがオオムギで、道央を境界とし道北や道東では短粒で幅が広い、吉崎・椿坂（1990）によって「擦文オオムギ」と称された短粒オオムギが、10世紀以後の香川三線遺跡、浜佐呂間遺跡、北斗遺跡、十勝太若月遺跡などから出土し、道央部以西からは長粒で幅が狭い長粒オオムギが8世紀頃から出土する（山田・椿坂 1995）。短粒オオムギは擦文文化の集落がオホーツク海沿岸に進出する前に集落を形成していたオホーツク文化期の二ツ岩遺跡（山田ほか 1991）、川西遺跡（吉崎 1995）、雄武堅穴群遺跡（山田 1995b）、目梨泊遺跡（吉崎 1994）の住居内の骨塚、もしくは骨塚が設けられるべき位置周辺からアワ、キビとともに検出された。オオムギの14C年代値や、住居跡から出土の土器型式から、穀物が出土するのはオホーツク文化期のなかでも7世紀から9世紀のことである。

擦文時代後半のK441遺跡（吉崎 1989a,b）を除けば道央以西からは短粒オオムギが出土せず、同様の形態の特徴を備えたオオムギはロシア沿海地方の初期鉄器時代ヤンコフスキー文化のマラヤ・パドシエスカ遺跡、オリガ文化期のシニア・スカリ遺跡、渤海時代のコンスタンチノフカ遺跡、金時代のアナニエフ遺跡など、初期鉄器時代から金代までの遺跡から出土する（山田、1994）。7～9世紀頃に、大陸との接触を保っていたオホーツク文化の集団により、青銅製・錫製品、鉄製品、ガラス玉など大陸系遺物とともに、オオムギやアワ・キビが持ち込まれていた可能性が高い。擦文時代の遺跡から出土するのは、オホーツク文化が崩壊もしくは擦文文化と融合した10世紀以後のことで、擦文文化の集団が融合したオホーツク文化の集団からオオムギを受け継いだと考えられる。

一方、道央以西の札幌市K435遺跡、H317遺跡、サクシュコトニ川遺跡、K39遺跡緑化地点、余市町大川遺跡、松前町札前遺跡および東北地方北部の遺跡からは長粒オオムギが出土し（山田・椿坂 1995）、吉崎・椿坂（1990）によって「蝦夷コムギ」と称されるコムギを伴う。

これに対し、吉崎（1995）によった、「2種類のタイプのオオムギが、大陸側から日本列島に伝播してきたときの当初の流入路の相違を反映しているとは必ずしも解釈できない。いいかえれば、特定品種が種々の環境適応の結果生じた変異の範囲内として理解できるかも知れない。」とした指摘がなされている。

確かに環境適応した品種の変異といった要素を考慮する必要性はある。しかし、①「擦文オオムギ」の出土時期が、大陸との交流の結果として大陸製品の出土量が多い7、8世紀のオホーツク文化の遺跡からであること、②擦文文化の遺跡から出土するのは、オホーツク文化が擦文文化に吸収された10世紀以降になってからであること、③その分布範囲が道央部以北に限定されること、④ロシア沿海地方では金代になるとこのタイプのオオムギと、長くて幅の狭いオオムギの2種類が併存したこと（山田 1994a）から、東北北部から伝播したものが変異したのではなく、大陸沿海地方から伝播したとする方が考えやすい。なお、椿坂（1998）によって長

粒オオムギが皮性オオムギで、短粒オオムギが裸性オオムギであることが明らかにされている。

畑作農耕の役割：藤本（1982）の「本来的な意味における農耕文化が、たとえ稲作農耕ではない焼畑的な農耕にしろ、定着して、生活の基盤がそれによってささえられていたとは考えがたい（略）擦文文化の成立にあたえた本州文化の影響は小さくないが、どうもその後の時代に影響が持続したようには思えない」とした指摘で代表されるように、擦文文化の農耕はあくまでも補助的なものであったとする考え方がいまだ強い。遺跡の立地や河川をせきとめた「ヤナ状遺構」の発見、焼土中からサケ類の骨が出土していることなどを根拠とし、縄文文化の伝統である漁労・狩猟が継続されたとする考えである。

作物種子とともに果実種子や堅果皮片が出土し、19遺跡からはサケの骨や遊離歯が多量に出土したほか、内陸部に位置しながらニシン科や海獣骨が検出された遺跡もあり、河川漁だけではなく海での漁労・狩猟が行われていたことも確かである（山田 1998）。瀬川（1996）によった、河川でのサケの大量の捕獲が擦文時代の開始の要因である本州との交易と無関係ではなく、サケは食料であると同時に交易品であったとする指摘があるように、多量の鉄製品、須恵器、コメなど東北北部との交易で得た物品の対価として、捕獲されたサケなどの魚類や陸獣・海獣の毛皮など北海道の特産物があてられたことが想定される。交易の対価や動物性食料確保のため、陸上や海上での狩猟・漁労活動を行った傍らで、畑作農耕でアワ、キビ、オオムギなどの穀物を生産し、野生の植物や果実の採集活動を行っていたと考えれば、同じ焼土中から魚骨や獣骨、栽培種や野生種の種子が発見されたとしてもなんら矛盾は生じない。また、青森県の陸奥湾岸で生産された塩が北海道との交易品の一つとなっていたことが事実であれば、その当時の北海道はすでに消化に当たって塩分を必要とする穀物を日常的に摂取していたこととなる。

擦文文化の畑作農耕がどれほどのウェイトをもったものであるかを考える上で問題となるのが、耕作形態と規模である。擦文文化に行われた農耕の形態について加藤（1980）は、アイヌ民族によって行われていた農耕の形態から、プロト“アラキ型”焼畑であったとした。しかし、擦文文化の遺跡が立地した沖積低地や扇状地上の微高地、海岸砂丘や台地上には平坦地が広がり、開墾にあたっての伐木・火入れしたことは推定されるものの、いわゆる焼畑農耕が恒常的に行われた可能性はきわめて少ない。近世の記録にアイヌ民族の農耕がプロト“アラキ型”焼畑に類似した形態として記述されるのは18世紀以降になってからである。その頃は鉄製品の供給制限行われ、松前藩による場所請負制のもとで、アイヌ民族の経済活動が対和人との交易から労働力として収奪された時期である。噴火湾岸では最近、17世紀半ばに噴出した火山灰下から、アイヌ民族によった鋤や鋤が無ければ造り得ない立派な畝をもった畑跡が発見され始めており（山田 1999）、18世紀以降とは状況が異なっていたことが明らかになりつつある。

群馬県の黒井峰遺跡で畝をもった畑地跡が発見され、同県西組遺跡で住居周辺に広域な畑地跡が発見されてから（能登 1991）、各地で畑地跡の発見が相次いでいる。最近では平安時代の岩手県梶角子久保IV遺跡や岩崎台地遺跡群（岩手県文化振興事業団 1988、1995）、青森県中野平遺跡（下田町教育委員会 1996）、東北町往来ノ上（2）遺跡（田中 1995）などでも畝をもった畑跡が発見されており、沖積低地には水田が作られ台地や丘陵上には畝をもった常畑が作

られていたことが明らかにされるとともに、往来ノ上（2）遺跡では寄生虫卵が検出された施肥用土壌も発掘され、畑に施肥されていたことも明らかになっている（小山・千葉、1995）。水田耕作や畝をもった畑で農耕を行っていた東北北部と交流を保ち、鉄製品や須恵器を移入していた北海道の擦文文化の集団に、畝をもった畑を造成する技術が伝播しなかったとは考えられず、その発見は時間の問題であろう。

擦文文化の集団は、経済基盤の一つとして畑作農耕を取り入れ、石狩低地帯周辺を中心とした道央部の遺跡でアワ、キビ、ヒエ、オオムギ、コムギなど6種類から11種類の作物を栽培し、吉崎・椿坂（1990）での指摘にあるような、稲作が欠落した畑作農耕を行い、欠落したコメを本州からの移入で補っていたと考えられる。

だが、道北部や道東部では3種類から多くても5種類の作物が確認されただけで、作物構成上からは補助的に農耕を行っていた感がある。しかし、ここで浦幌町十勝太若月遺跡16号住居からの栽培種子の出土状態に注目したい（後藤 1974）。カマド前に横倒しとなった土器にびっしり詰まったオオムギ、住居中央の板材の上に盛られていたキビとシソ属、北西壁に密着したまま検出されたキビから、当時農耕生産物に依存した食生活がなされていたことが伺える。根拠には乏しいがこのような状況を基に、道央から道南では年間に必要な食糧資源のかなりの部分を農耕活動で生産し、道北・道東でも漁業・狩猟活動の傍らで、食糧資源の一部を畑作農耕での生産物で充足してたものと考ええる。

擦文時代の主生業は何であったかとするよりは、畑作農耕・漁労・狩猟・採集といった生産手段をもって、地域の生態的な環境に応じて補完しあった生業形態で食料確保が行われ、交易で入手した鉄製品などの対価を、漁獲物や狩猟物で充てていたと考える。

5. おわりに

擦文文化が成立した際に利器として鉄製品を選択して自己完結経済の一部が崩壊し始めるが、13世紀頃には煮沸具・容器としての土器から鉄鍋を選択し自己完結経済の崩壊はさらに進み擦文文化は終末をむかえる。その終末について、鎌倉幕府による奥州藤原征討に端を発した東北北部の社会的・文化的動向や、平安末から鎌倉時代にかけて日本海沿岸ルートによる急激な商品経済の発展が要因とされているが、ほかに吉野（1982）、阪口（1984）、北川（1995）らによって指摘された、13世紀以降の気候の寒冷化もその要因の一つとしてあげられる。気候の悪化が、定着しつつあった畑作農耕に与えた影響の大きさも考慮にしなければならない。

擦文文化の後、数百年にわたってアイヌ文化が展開されたが、近世に記録されたアイヌ民族によった農耕はきわめて粗放的で小規模なものとされている。しかし、虻田町高砂遺跡や伊達市ポンマ遺跡では、1663年の有珠b火山噴出物下から畝をもった広域な畑跡が発見され（山田 1998b）、1667年の樽前b火山噴出物下のアイヌ文化期の遺物包含層や遺構から鉄・鋤先、鎌が発見され、数遺跡からは多量のヒエなどの農作物が出土するなど、道央では17世紀中葉頃にも鉄や鋤を使用して畝をもった畑を造成し、ヒエなどの雑穀農耕を行っていたことが明らかになっている（山田 1999）。擦文文化の農耕を説明するのにアイヌ民族によった農耕形態が参考とさ

れてきたが、もはやそれ自体を考え直す時期にきているのである。

引用・参考文献

赤松守雄・右代啓視

1992 「北海道および南サハリンの中世温暖期についての一考察」『1991年度北の歴史・文化交流研究事業中間報告』pp. 91-108 北海道開拓記念館

旭川市教育委員会

1984 「錦町5遺跡」

天野哲也

1983 「擦文社会における金属器の普及量と所有形態」『考古学研究』30-1 pp. 82-111

藤井誠二・秋山洋司

1999 「K39遺跡北十八条道路地点」『市町村における発掘調査の概要』平成10年度 北海道教育庁生涯学習部文化課

藤本 強

1979 「北辺の遺跡」教育社

1982 「擦文文化」教育社

Gary Crawford

1987 Sakushukotoni-gawa Plant Remains, 「サクシュコトニ川遺跡（1）」pp. 143-160 北海道大学埋蔵文化財調査室

後藤秀彦

1974 「住居址の発掘について」『十勝太若月遺跡—第二次調査—』pp. 6-50 浦幌町教育委員会

石附喜三男

1974 「擦文式文化における農耕作物」『古代学研究』74号 pp. 36-38

岩手県文化振興事業団

1988 「岩手県埋蔵文化財発掘調査略報（昭和62年度分）」岩手県文化振興事業団文化財調査報告書第126集

1995 「岩崎台地遺跡群発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団文化財調査報告書第214集

加藤晋平

1980 「擦文期の栽培植物について—とくにソバの問題」『北方科学調査報告』1 pp. 123-138、筑波大学

北川浩之

1995 「屋久杉に刻まれた歴史時代の気候変動」『歴史と気候』講座文明と環境第6巻 pp. 47-55 朝倉書店

河野広道

1959 「北海道出土の大型U字形鉄器について」『北海道学芸大学考古学研究会連絡紙』

小山陽造・千葉憲一

1995 「往来ノ上（1）農耕遺跡の自然科学的調査研究」『往来ノ上（1）遺跡』pp. 91-108 青森県東北町教育委員会

松谷暁子

1986 「豊富町豊富遺跡出土種子の同定について」『市立旭川郷土博物館研究報告』第16号 pp. 1-11

Matsutani Akiko

- 1988 Identification of Common Millet from the Toyosato Site in Hokkaido by Means of a Scanning Electron Microscope .J. of Anthropol. Nippon, 96 (1), pp. 111-117

三浦圭介

- 1991 「本州の擦文文化」『考古学ジャーナル』No341 pp. 22-28 ニュー・サイエンス社
1995 「青森県での遺跡調査におけるフローテーション法の導入とその成果について」『考古学ジャーナル』No355 pp. 29-31、ニュー・サイエンス社

能登 健

- 1991 「稲作と畑作」『季刊考古学』第37号 pp. 36-39 雄山閣

阪口 豊

- 1984 「日本の先史・歴史時代の気候―尾瀬ヶ原に過去7,600年の気候変化の歴史を探る―」『自然』460 pp. 18-36

桜井清彦

- 1967 『アイヌ秘史』角川新書

佐々木高明

- 1988 「日本における畑作農耕の成立をめぐる」佐々木高明・松山利夫編『畑作文化の誕生』pp. 1-22、日本放送出版協会

沢 四郎・西 幸隆

- 1975 「釧路湿原周辺の遺跡分布」『釧路湿原総合調査報告』

下田町教育委員会

- 1996 「中野平遺跡」下田町埋蔵文化財調査報告書第7集

鈴木秀夫

- 1990 「気候の変化が言葉をかえた」日本放送出版協会

瀬川拓郎

- 1996 「擦文時代における地域社会の形成」『考古学研究』第43巻第3号 pp. 86-99
1997 「擦文時代における交易体制の展開」『北海道考古学』第33輯 pp. 19-26

田中寿明

- 1995 「2. 畝状遺構」『往来ノ上(1) 遺跡』pp. 43-45 青森県東北町教育委員会

椿坂恭代

- 1989 「サクシュコトニ川出土植物遺存体の再検討」『北大構内の遺跡』7 pp. 21-26 北海道大学埋蔵文化財調査室
1998 「オオムギについて」『道を辿る』石附喜三男先生を偲ぶ本刊行委員会 pp. 245-250

上野秀一

- 1992 「本州文化の受容と農耕文化の成立」『古代の日本』9 東北・北海道 pp. 451-472 角川書店

宇田川洋

- 1976 「擦文社会の一側面」『季刊どるめん』No8 pp. 66-77
1979 「70年代擦文文化の研究」『季刊どるめん』No22 pp. 5-16

八幡一郎編

- 1966 『北海道根室の先史遺跡』根室市

山田悟郎

- 1994 「ロシア沿海地方から出土する栽培植物について―ソバとオオムギを中心として―」『1993年度北

の歴史・文化交流研究事業中間報告」pp. 29-50 北海道開拓記念館

- 1995 a 「擦文時代の農耕について」『雄武堅穴群遺跡』北海道開拓記念館研究報告第14号 pp. 97-120
1995 b 「住居内から出土した植物遺体について」『釧路市北斗遺跡V』pp. 45-52 釧路市教育委員会
1996 「オホーツク文化期に利用された植物」『北海道開拓記念館研究紀要』第24号 pp. 49-66
1998 「日本列島北端で展開された雑穀農耕の実態」『北海道開拓記念館研究紀要』第26号 pp. 1-22
1998 b 「近世アイヌの畠」『考古学ジャーナル』No439 pp. 26-30
1999 「中世および近世アイヌ文化期遺跡から出土した作物」『北海道開拓記念館研究紀要』第27号 pp. 9-18

山田悟郎・椿坂恭代

- 1989 「札前遺跡から産出した植物遺体について」『札前II』pp. 33-38、北海道松前町教育委員会
1991 a 「札前遺跡から産出した雑穀について」『札前III』pp. 28-33、北海道松前町教育委員会
1991 b 「遺跡から出土するソバについて」『91' Project Seeds News』No3 pp. 7-17
1995 「大陸から伝播してきた栽培植物」『北の歴史・文化交流研究事業報告』pp. 107-132、北海道開拓記念館

山田悟郎・椿坂恭代・右代啓視

- 1991 「網走二ツ岩遺跡から出土した栽培植物」『北海道開拓記念館調査報告』第30号 pp. 27-38

矢野牧夫

- 1989 「東広里遺跡から出土した特殊な植物遺体」『深川市東広里遺跡』北埋調報57 pp. 81-83、北海道埋蔵文化財センター

横山英介

- 1990 「擦文文化」考古学ライブラリー56 ニュー・サイエンス社

吉野正敏

- 1982 「歴史時代における日本の古気候」『気象』26 pp. 11-14

吉崎昌一

- 1984 「擦文文化研究の諸問題」『北海道考古学』第20輯 pp. 65-74
1986 「苫前町香川三線遺跡と擦文文化」『香川三線遺跡』pp. 212-223 北海道苫前町教育委員会
1989 a 「K441遺跡北33条地点出土の植物種子」『K441遺跡北33条地点』札幌市文化財調査報告書XXXVI pp. 52-58 札幌市教育委員会
1989 b 「K441遺跡北34条地点出土の植物種子」『K441遺跡北34条地点』札幌市文化財調査報告書XXXVII pp. 70-80 札幌市教育委員会
1990 a 「北海道恵庭市柏木川11遺跡の植物遺体」『柏木川11遺跡』pp. 104-113 恵庭市教育委員会
1990 b 「大川遺跡出土の炭化種子予備分析結果」『1989年度大川遺跡発掘調査概報』p. 19 余市町教育委員会
1991 「小樽市蘭島遺跡D地点の炭化植物種子」『蘭島遺跡D地点』小樽市埋蔵文化財調査報告書第5輯 pp. 141-148、北海道小樽市教育委員会
1993 「K435遺跡の植物遺体」『K435遺跡』札幌市文化財調査報告書XLII pp. 313-340、札幌市教育委員会
1994 「目梨泊遺跡出土のオホーツク文化の植物種子」『目梨泊遺跡』pp. 335-349、枝幸町教育委員会
1995 「湧別町川西遺跡出土の植物種子」『湧別町川西遺跡』北方民族博物館調査報告、pp. 69-75
1996 「北海道の遺跡出土の栽培植物」『博物館フォーラム アイヌ文化の成立を考える』pp. 121-131 北方民族博物館

吉崎昌一・椿坂恭代

1990 「サクシュコトニ川遺跡にみられる食料獲得戦略」『北大構内の遺跡』8 pp.23-35 北海道大学

1995 「H317遺跡から検出された植物種子」『H317遺跡』札幌市文化財調査報告書46 pp.238-253 札幌市教育委員会